

社会科地域教材としてのイラスト作成

——群馬の遺跡を中心として——

佐藤理重 小保方香里

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1 はじめに | 3 群馬の遺跡をもとにしたイラスト作成 |
| 2 小学校歴史教育におけるイラストの位置づけ | 4 イラスト活用にあたっての提案 |
| (1) 新学習指導要領とイラスト | 5 おわりに |
| (2) 教科書の「想像図」の変遷 | |

——論文要旨——

学校教育における歴史学習という観点から見ると、古代の様子を描いたイラストは歴史を学び始めた小学生にとって不可欠の教材である。それは、具体的な生活の様子をイラストとして提示することで時代の全体像を把握できるという有効性による。

学校で本格的な歴史学習がはじまる小学6年生の教科書をみると、「想像図」が盛んに描かれていることもこのことを示している。さらに、その「想像図」は改訂ごとに具体化・細密化の方向をもっており、教材として果たす役割の重要性がよみとれる。

また、平成12年に新しく改訂された学習指導要領(小学社会)では、身近な地域の遺跡や文化財などの観察や調査等を活用することを勧めており、地域に密着した歴史学習の展開が期待されている。

地域にある遺跡(埋蔵文化財)は、生活をしている地面の下に残されている地域の歴史そのものであり、それをイラストとして提示できれば、子どもたちの興味・関心を喚起できる身近で具体的な歴史教材となり得ると考えた。

本稿では、小学校における歴史学習の教材として、群馬県にある遺跡の調査成果をもとにしたイラストの作成を試みた。

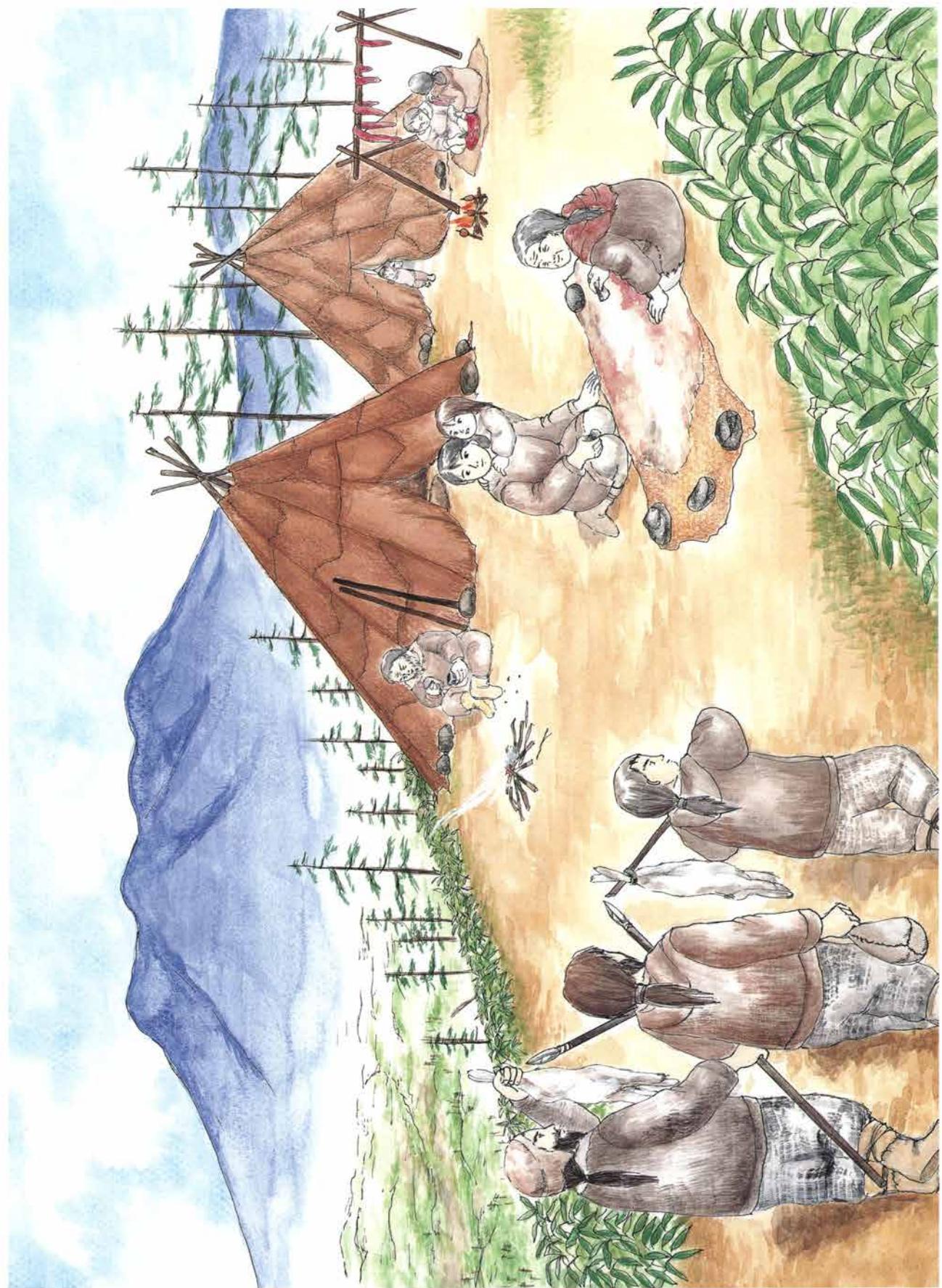
各イラストの時代と根拠とした遺跡は、①旧石器時代 赤城南麓にある多田山丘陵 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡、②縄文時代 赤城村三原田遺跡、③④弥生時代 高崎市日高遺跡、⑤古墳時代 群馬町保渡田古墳群及び三ツ寺I遺跡、とした。

キーワード

対象時代 旧石器・縄文・弥生・古墳 現代

対象地域 日本(特に群馬県)

研究対象 小学校歴史地域教材、イラスト



イラスト① [旧石器時代]



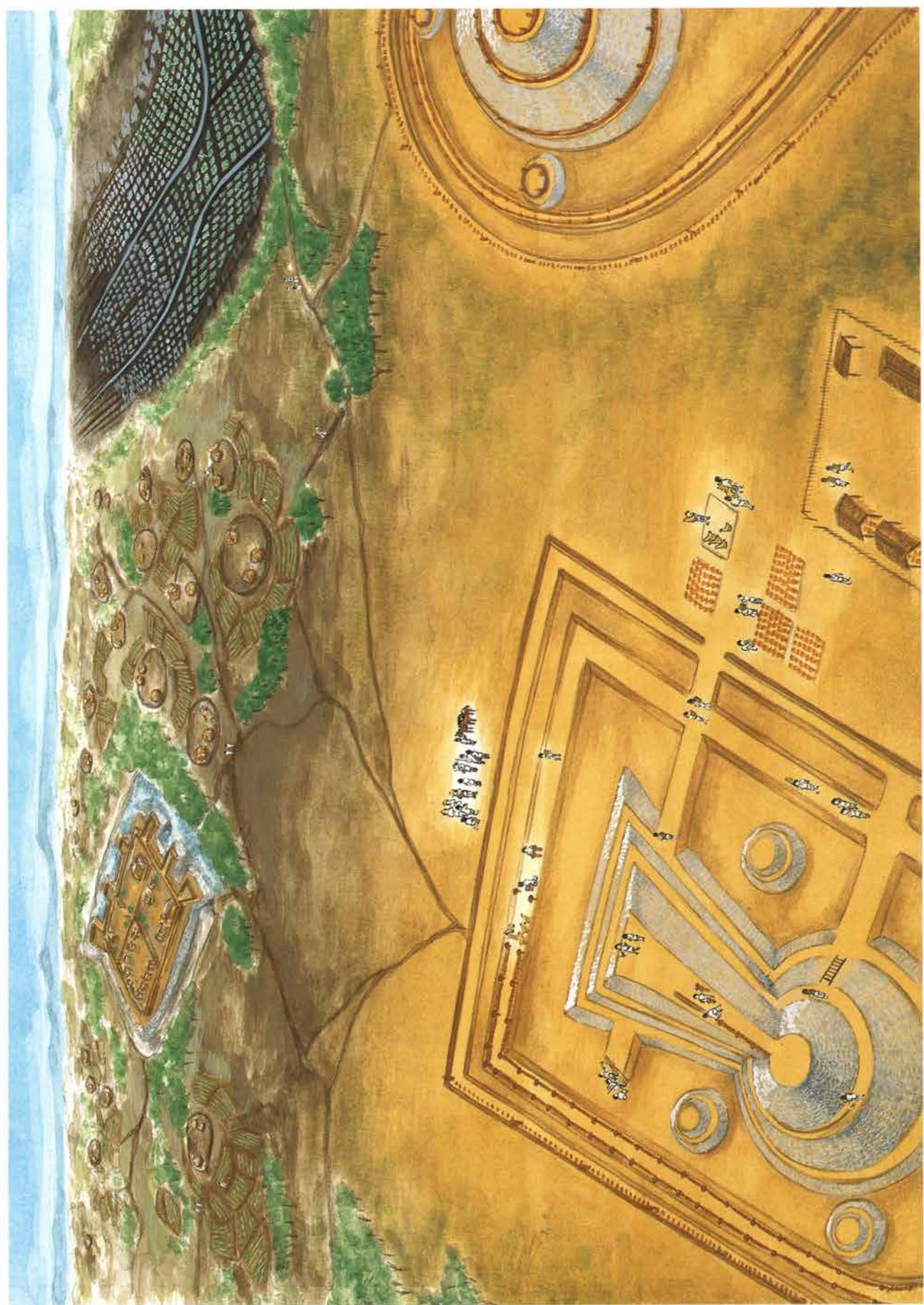
イラスト② [縄文時代]



イラスト③【弥生時代・初夏】



イラスト④【弥生時代・秋】



イラスト⑤ [古墳時代]

1 はじめに

筆者らは今まで、様々な時代にわたる遺跡の発掘調査に携わってきた。また、調査成果を検討し、その遺跡の性格を分析することで具体的な地域の歴史実体にふれることも体験した¹⁾。さらに、遺跡での現地説明会、小・中学生の体験発掘・職場体験の受け入れなどの教育普及活動も実施してきた。

しかし、発掘している遺跡を見ながら、当時の生活の様子を小・中学生に理解させることはかなり難しいと感じていた。それは地域教材として遺跡を活用する教員や県民であっても同様であろう。そこで遺跡の具体的な生活像を示すために、イラストを用いた教材化を考えた。発掘された遺跡から得られる情報は限られている。当時の人々の生活と比較すれば、遺構や遺物として残されたものは、そのほんの一部にすぎないであろう。衣服や木製品など有機質の生活用具のほとんどは失われているからである。また、精神的な部分などは想像の域を越えられないという現実がある。そのため、「遺跡のイラスト化」には大きな障害があるといえよう。それでも、あえて取り組んでみようと思ったのは、イラストという具体的なもので表現することにより、歴史を学び始めた子どもたちの興味や関心を喚起できると考えたからである。また、地域の遺跡は子どもたちが生活をしている地面の下に残されている先人の生活そのものであり、それをイラストとして提示できれば、もっとも身近な歴史学習の教材となりうるであろう。

本稿では、群馬県内における遺跡の調査成果をもとにして、小学校社会科歴史学習において教材として使用できるイラストを作成し、埋蔵文化財の地域教材化への試論としたい。

2 小学校歴史教育におけるイラストの位置づけ

(1) 新学習指導要領とイラスト

ここでは、教育課程の基準である小学校学習指導要領の社会第6学年の新たな改訂点に触れつつ、地域の遺跡にもとづくイラストの教材としての有効性を考察する。

新しく改訂された学習指導要領は、これまでの様々な課題への対応と、21世紀に向けて我が国の社会の変化をふまえた新しい教育を目指し、平成10年12月に新しく告示され、平成14年4月1日から全面実施される。その全体を通しての「ねらい」は次のとおりである。

- 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人を育成する
- 自ら学び、自ら考える力を育てる
- 基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす
- 創意工夫をこらし特色ある学校をつくる

これを受け、社会科においてもこの四つのねらいを具体的に実現していくことが求められ、各学年の目標が

定められた。第6学年社会の目標は次のとおりである。

- (1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようになるとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようとする。
- (2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようとする。
- (3) 社会的事象を具体的に調査し、地図や年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようとする。

この目標について、今回作成するイラストを教材として扱うことを前提としたとき、関係が深いと思われる(1)と(3)の解説をみていく。

(1)の前半は社会的事象についての知識・理解にかかわる理解目標である。新たに「興味」と「国を愛する心情」が加わっている。これは、抽象的で高度な内容の学習に陥りがちな第6学年の学習を具体的な事例を中心としたものになるように配慮したためである。(3)は能力に関する目標であり、前回のものに「社会的事象を具体的に調査し」と「調べたことを表現する」を新たに加えている。これは、社会科の学習に必要な観察・調査や資料活用の技能、表現する能力、我が国の歴史と政治の働きや国際理解に関する社会的事象を指向・判断する能力を統一的に育成することを配慮したためである。また、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など、子ども自らが「調べ、考える」主体的な学習を可能にするためである。

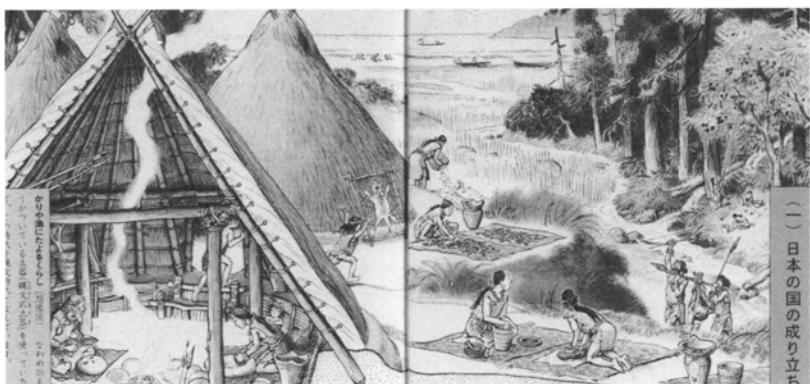
つまり、新しい学力観に立つ教育の基本的な考え方は従来の知識や技能に偏重した教育を改め、子ども一人一人が自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力の育成を重視するものである（北ほか1999）。

これまでの社会科の学習は、ともすると暗記中心の授業に陥りがちな教科であるといわれてきた。新しい学力観に立って社会科の授業を構成するとき重要なことは、子ども一人一人が自ら問題意識をもって考えたり、判断したりしながら、問題解決に取り組むことである（北1997）。

イラストは具体的でイメージをつかみやすく、子どもたちが興味・関心を示しやすい。また、各時代のイラストを教材とし、子どもたち自身が必要な情報を抽出する、各時代の比較を通して変化した点などを挙げる、なぜ変化したのか調べる、など授業に活用することができる。つまり、イラストは「具体的な事例」であり、「主体的な学習」や「作業的学習」を可能とし、「資料活用の技能」

縄文時代

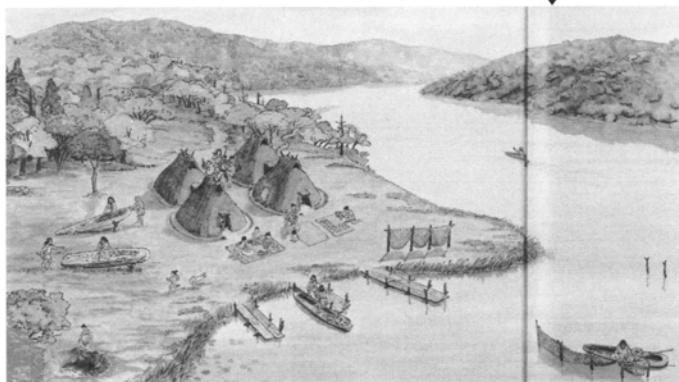
昭和版



「やりや漁にたよるくらし」

①

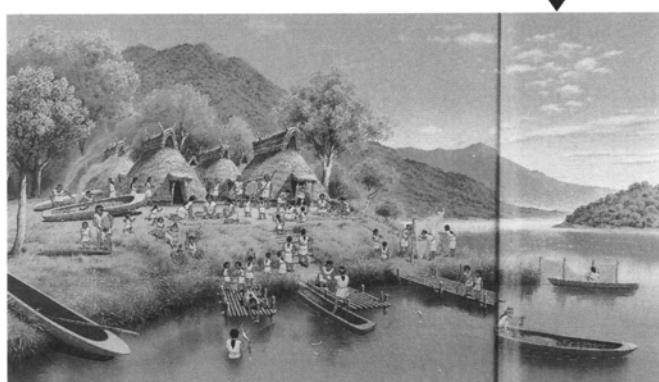
平成4年度版



「大昔の人々のくらし」

②

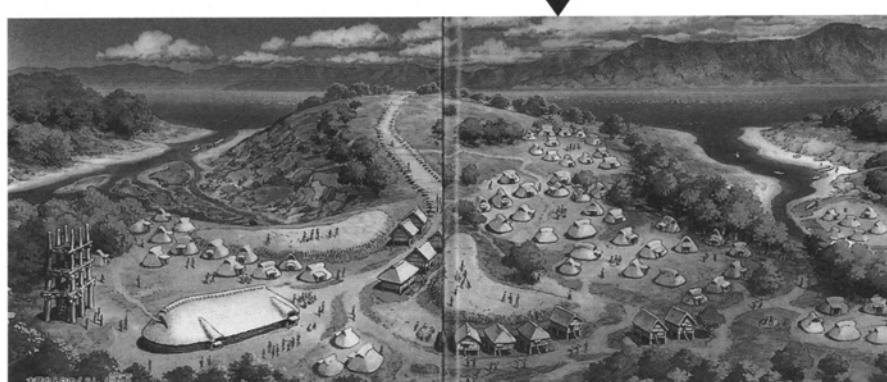
平成8年度版



「大昔の人々のくらし」

①⑤⑥ 江口準次氏・画
②⑨ 杉本一文氏・画
③⑦⑧⑩⑪ 山本二三氏・画
『新訂 新しい社会 6上』
(東京書籍) より

平成12年度版



「大昔の人々のくらし」

④

弥生時代



「米づくりが始まったころの様子」 ⑤



「登呂のむらの米作り」 ⑥



「米づくりが始められたころの様子」 ⑦



「米づくりが始められたころの様子」 ⑧

古墳時代

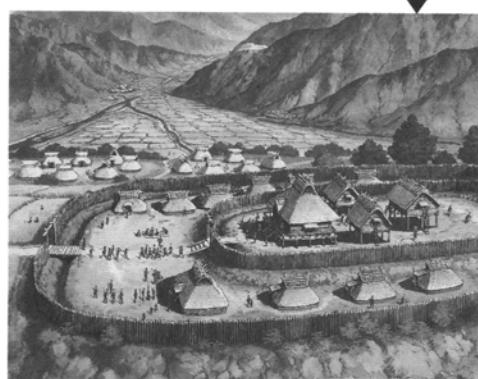
該当する「想像図」なし



「古墳がつくられたころのくらし」 ③



「米づくりが広がったころの様子」 ⑩



「米づくりが広がったころの様子」 ⑪

図1 教科書の「想像図」の変遷

および「表現する能力の育成」がなどがかなえられる教材であるといえる。

また、今回の改訂に伴い「各学年にわたる内容の取扱い」では、博物館や郷土資料館等の活用、身近な地域の遺跡や文化財などの観察や調査、公共図書館の活用などを勧めている。地域の施設等を積極的に活用して、社会科の学習を展開することを求めているのである。このことは、いずれも地域の特色やよさを生かしながら「地域密着型の社会科」の展開を目指しているからである(北ほか 1999)。小学 6 年生では初めて本格的な日本の歴史を学習するわけであるが、6 年生といえどもより具体的に、より実感的に理解させていくことが重要となる(北 1997)、といった指摘もなされている。

以上のようなことから、子どもたちが暮らしている地域の遺跡をもとにしたイラストは、新しい学力観に立った社会科の学習に求められていることと、まさに適合する教材となると思われる。

(2) 教科書における「想像図」の変遷

教科書²⁾の中でイラストはどのように扱われてきたのであろうか。ここでは、その変遷をたどると共に、そこから読みとれるイラストに対する評価がどのように変わってきたかを考察したい。

図 1³⁾は群馬県下で広く使用されている東京書籍発行の教科書中のイラストの変遷をたどったものである。昭和 58、61、64 年度版(以下、昭和版という)平成 4、8、12 年度版⁴⁾と過去 6 回の改訂版の縄文・弥生・古墳時代(旧石器時代の「想像図」はない)のイラストについて取り上げたが、昭和版は 3 回の改訂で変化が見られないためまとめて示した。

また、教科書ではイラストを「想像図」としているので、教科書中のイラストを指すに当たっては「想像図」という言葉を用いることにする。

図 1 に沿って、各時代ごとの「想像図」の変遷をたどってみよう。

〈縄文時代〉

昭和版は「かりや漁にたよるくらし」というタイトルで、特に根拠とした遺跡名などの記載はなく、見開きに占める割合が約 2 分の 1 の大きさである。

平成に入るとタイトルはどれも「大昔の人々のくらし」となる。平成 4 年度版は鳥浜貝塚⁵⁾をもとにした「想像図」となり、見開きに占める割合が 2 分の 1 弱ほどの大きさである。平成 8 年度版も鳥浜貝塚の「想像図」であるが、4 年度版は俯瞰した図であったのに対し、8 年度版は多少目線を下げた図となった。大きさは 4 年度版と同様である。平成 12 年度版は、三内丸山遺跡⁶⁾をもとにした「想像図」に変わる。大きさは見開き約 3 分の 2 程度になった。

〈弥生時代〉

昭和版は「米づくりがはじまったころの様子」というタイトルで、縄文時代と同様に根拠とした遺跡名の記載はない。平成 4 年度版は「登呂のむらの米づくり」で、タイトル通り登呂遺跡⁷⁾をもとにした「想像図」である。平成 8・12 年度版は「米づくりが始められたころの様子」というタイトルで、古墳時代の「想像図」と地域や構図を同じにし、それらを見開きで並べて対比させている。また、8 年度版では集落の周りに柵が巡っており、集落内には柵があるが、12 年度版になるとそれらがなくなり、水田の範囲や位置も変わり縮小している。どの「想像図」も大きさは 1 ページに占める割合が半分ほどである。弥生時代に関してはどの版にも、集落内で行う作業の様子や米づくりにともなう作業に焦点を合わせた「想像図」も掲載されている。

〈古墳時代〉

昭和版には相当する「想像図」はない。平成 4 年度版は「古墳がつくられたころのくらし」と題した「想像図」で、根拠とした遺跡名の記載はない。平成 8・12 年度版は弥生時代のものと対応した「米づくりが広がったころの様子」というタイトルの「想像図」である。根拠とした遺跡は森将軍塚古墳⁸⁾である。集落の周りの柵が 8 年度版よりも 12 年度版では、頑強なものに変化している。また、建物の位置なども変わっている。「想像図」の大きさは弥生時代と同じくどれも 1 ページの半分程度である。

次に、図 1 で示した変遷の様子から読みとれることをいくつか挙げてみたい。

まず、全体的には改訂ごとにほとんどの「想像図」がより具体的、細密的になっているということである。

そして、個々の「想像図」に目を向けると昭和版には根拠とした遺跡の記載がないが、平成に入ってからは遺跡名や地域を示すようになっていることも大きな変化である。これは、発掘調査の進展により、具体的な考古学的成果がより多く得られたこととも関連していると言えよう。

また、昭和における 3 回の改訂では「想像図」に全く変化がないが、平成になると改訂の度に構図や細部を描き直している。これは学習指導要領の改訂に伴う変化に加え、先に述べたことと同様に、最新の考古学的成果が取り入れられているためであろう。

さらに、平成 8・12 年度版の弥生時代と古墳時代は、同じ遺跡(森将軍塚古墳周辺)をもとに両時代の「想像図」を見開きに並べ、比較しやすいように掲載している。これは教材として、より有効的に使用するための配慮からであろう。

それから、古い年度のものほど個々の活動場面が別の「想像図」として描かれていたが、新しい年度のものほど

集落の全体像を表現する傾向がうかがえる。具体例を挙げると、弥生時代の「想像図」にその傾向が顕著である。昭和版の弥生時代は図1にある集落の様子を描いた「想像図」に加え、「復元された水田」の写真、「水田づくりの様子」「板をつくる」「床の高い倉庫とねずみがえし」「米づくり」「収かくを感謝する祭り」等の個別の想像図、米づくりに使った道具「木製のくわ」「田げた」「石ぼうちょう」暮らしに用いた道具「木のしゃくし」「木のうつわ」「土器」の写真が示されている。平成12年度版では、それらの場面が集落全体の「想像図」中にも取り上げられてきている。これらのことから、「想像図」を観察する子どもたちの主体的な学習活動を促す意図が読みとれる。また、このことは各時代の人々が生活している様子や、時代の変化を理解しやすいという有効性があるだろう。

これまで述べてきたことから、教科書においても「想像図」の果たす教材としての役割はますます高くなっていることがわかる。

3 群馬の遺跡をもとにしたイラスト作成

これまで述べたように、イラストは教材としての有効性が非常に高いことがわかった。

それでは、地域にある遺跡をもとにしたイラストについては、どうであろうか。

前述したように、学習指導要領でも「地域密着型の社会科」の展開が求められている。この点からみると筆者らが作成するイラストは新しい学力観に立つ教材であるということができるだろう。

また、学校では教科書に沿って授業が進められるであろう。そのような学習の中で、地域の遺跡をもとにしたイラストを教材化することにより、通史学習と同時に自分たちが暮らしている地域およびその歴史に対しても興味・関心を深められる、ということ可能になろう。

さらに、小学6年生の発達段階では、ともすると自分たちが住む地域に教科書で学習する各時代の遺跡が存在するということも、補足されなければ気づかない点かもしれない。そのような場合、地域にある遺跡のイラストが提示できれば、地域社会の具体的な歩みを捉えやすい。

以上のようなことから、群馬の遺跡を中心として、その調査成果をもとにしたイラストは有効な教材となりうると考え、その作成を試みる。作成するのは、旧石器・縄文・弥生・古墳時代のものである。

ここで、述べておかなければならぬのは、筆者らは旧石器～古墳時代のイラストを作成したが、旧石器時代は教科書にほとんど取り上げられていない⁹⁾ということである。これは学習指導要領に則り、取り上げられていないものと思われる。その内容(1)のアは、「農耕の始まり、古墳について調べ、大和朝廷による国土の統一の様子が分かること。その際、神話・伝承を調べ国のかたちに関する

考え方などに关心をもつこと。」となっており、内容自体に旧石器時代が盛り込まれていないのである。

旧石器時代については、学習指導要領の内容外ではあるが、縄文時代の生活をより深く理解するための教材として扱うことを目的にイラスト化した¹⁰⁾。

以下、群馬の遺跡を中心としたイラストの作成にあたり筆者らが留意した点、また、各イラストで取り上げた遺跡や集落内の様子などの解説をしていく。

イラスト①【旧石器時代】

場面設定

群馬県における旧石器時代の遺跡は、赤城山南麓に多く分布している。下触牛伏遺跡、三和工業団地Ⅰ遺跡など代表的な遺跡が集中する場所である。

今回、取り上げたのは後期旧石器時代にあたる約20,000年前¹¹⁾の多田山丘陵である。¹²⁾

多田山丘陵は、群馬県東部、前橋市と佐波郡赤堀町の境界に位置する。今から約20～30万年前に起きた赤城山の山体崩壊により形成された小丘陵のひとつで、標高は155mほどである。近年、旧石器時代の石器が多数発見され、当時の移動生活を行う上での中心的な場所だったと考えられている。

イラストでは、ここにテントを構えたある集団を想定してその生活を復元した。

周辺の景観

多田山丘陵の中腹。南東方向から北西にそびえる赤城山を望む。

植 生

植生の復元は、赤城山南麓の平坦地にあって出土樹種の分析が詳細に行われた、三和工業団地Ⅰ遺跡を参考とした(群馬県埋蔵文化財事業団1999)。それによると、20,000年前の赤城山南麓は現在の関東の山地や中部山岳地の気候に近く、現在よりやや寒冷であったと思われる。トウヒ、エゾマツなどの常緑針葉樹の森がまばらに広がり、クマザサが繁茂する風景を復元できる。

構成人数

旧石器時代、普遍的にみられる血縁的小集団を単位集団と呼ぶ(近藤1976)¹³⁾。夫婦とその子供、少数の近親者からなるのが家族であり、家族が数単位集団で形成されるのが単位集団である(鷺田1996)。鷺田は、旧石器時代において、単位集団から構成される大集団、小集団の問題について触れているが、日常生活(集中して採集・狩猟を行わない場合)においては、少数の単位集団が基本となっていたとしている。イラストではこれに従い、

単位集団の内訳を2家族10人とした。男性は壮年2人、老年1人、少年1人、幼年1人、女性は成年4人、老年1人、少女1人とする。

住居

日本では、旧石器時代全体を通じて住居址の発見例は少ない。そのようななかで、大阪府藤井寺市はさみ山遺跡で発見された柱穴は当時の住居の様子を知る手がかりとなる。柱穴から復元される住居は、直径6m、壁面が天井に向かって傾いたドーム状のもので、天井の中心が出入口側に傾く（大阪府教育委員会 1986）。周囲は毛皮で覆われたと思われる。日本国内では最大級の直径を持つ。一方、時代はやや下って約18,000年程前のものとなるが、群馬県でも富士見村の小暮新山遺跡で住居¹⁴⁾が発見されている。こちらは直径4mであり、日本国内で発見される住居の平均的な規模である（細野2000）。イラストでは、住居の規模を平均的なものとし、外観ははさみ山遺跡のものを参考とした。

石器作り

イラストでは、石刃石核、ハンマーストーンを使用した石刃技法で石器を製作する様子を描いた。石刃技法は、手で固定した石刃石核をハンマーストーンで打ち欠いて、石器のもととなる石刃をつくる方法である。

多田山丘陵では出土した石器類から、石器製作跡があったと考えられ（石坂・麻生1999）、ここから実際に石刃石核、ハンマーストーンが出土している。

狩猟

単位集団の構成人員のうち、成年の男性2人と少年1人が日帰り程度の狩猟を終えて帰ったところである。狩猟具はナイフ形石器を装着した槍を使用している。大規模な狩猟ではないので、捕らえたのは小型の獲物（ウサギ）にした。

皮なめし

当時の人々は寒冷な気候に対応するために、動物の毛皮を利用したと考えられ、その加工は大変重要なものであった。皮をなめすためにはスクレイパーが使用される。多田山丘陵においても出土しているので、当地でも皮なめしが行われたと考えられる。イラストでは女性によって皮なめしが行われている場面を設定した。後期旧石器時代前半より、生皮の剥離から縫製に至るまでの皮革加工システム確立の可能性があったとされるが（堤2000）、具体的な作業の工程は明らかでない。当時の皮革加工を知る手がかりとしては、現在でも狩猟生活を送る北方先住民などの例が挙げられる（大塚1987、堤2000）。イラストでは中国北端のエヴェンゲ族などの皮なめしを参考と

して、その初段階である生皮からの肉・脂肪の除去作業を行っている様子を描いた。

イラスト② 【縄文時代】

場面設定および立地

三原田遺跡は、赤城西麓に位置し、台地状になった平坦な場所に営まれる。縄文時代前期から後期にかけて一所に連続的に環状集落が形成されているが、イラストでは中期後半の環状集落とした。

季節は秋を設定した。集落内では人々が石皿での粉引き、土器づくり、調理、採集した食物の選別、薪の選別、などの作業をしている。集落外の森で木の実の採集をする人、獲物を手にし狩りから戻った人、それを出迎えるように籠に入ったキノコやブドウをもって立つ人などを描き、当時の集落での生活を表現した。これらは、「縄文人の生活カレンダー」（小林 1975）に従っている。

集落

集落は、群馬県赤城村の三原田遺跡をモデルとする。この遺跡は関東地方における典型的な中期集落である。集落全体が発掘され、調査成果の研究も進んでいる。このことから、当時の集落の様子を復元する資料として適している遺跡と言える。

住居数およびその人口

14軒とし、それらが環状に巡っている。1軒あたり4～5人が生活していることを想定し、集落の人口は70人ほどと思われるが、住居内にいる者、集落外へ出かけている者を想定し、イラスト中には50人前後を描いた。

住居

イラスト中央部の敷石住居の外観は、「赤城村三原田遺跡—敷石住居移築復原工事略報告—」による。これは出土した一区四十五号敷石住居の上屋を移築復原した際のデータである。このうちおもに、イラスト復原に必要な外観の情報と、外観に直接関係する内部の構造を参考とした。

集落内の住居は、時期が下るにつれて床面積が小さいものから次第に広くなる。14軒中12軒の住居を敷石住居として描いている。また、建築された時期差を表現するためやや大きな住居1軒、やや小規模なもの1軒、棟方向の違うものを2軒描いた。

狩猟

男性7人が狩りに出かけ、集落に戻ってきたところである。狩猟具は三原田遺跡で石鏃が出土していることから弓矢とした。獲物は「縄文人の生活カレンダー」（小林 1975）より、鹿とウサギとした。また、犬を狩猟に用いて

いる。

土器・石皿

土器づくりは女性中心に行われ、三原田式土器を製作している。粉ひきに使用している石皿は、出土例より有縁のものとした。

貯蔵穴

三原田遺跡では貯蔵穴が多数あるが、住居と同時期であるものの数が不明であるため、イラストでは約10基とした。

採集食物の天日干し・調理等

集落の出入り口付近で行っている作業は、採集した堅果類を天日干し、選別、粉ひき、加熱しているところである。この一連の作業工程については「ジザイモチをつくるプロセス」(渡辺1983)に従った。

カゴ・敷物

縄文時代には、植物性の材料を使った多様な編物、カゴ類が作られていた(植松1980)。鳥浜貝塚や三内丸山遺跡ではそれらが出土している。

イラストでは堅果類・キノコの採集で肩掛けのバスケットや平坦なカゴを、堅果類・加工食品の乾燥、土器作りに敷物を使用している。縄文土器は製作時に敷物として編物が使用される場合もあり、土器底部の圧痕から、その存在がわかっている(植松1980)。

衣 服

縄文時代の衣服については出土例が乏しく不明な点が多い。ここでは、尾関の復元例を参考にした(尾関1996)。尾関は、江戸～明治時代にかけて新潟県、長野県の一部で発達した越後アンギンと呼ばれる布、各地の縄文時代の遺跡から出土した編布、土偶のデザインから、衣服を実際に製作している。復元された衣服は夏用で、半袖の貫頭衣風の上着と膝丈のズボンを着用する。イラストでは、秋という季節にあわせ、長袖、くるぶしまでのズボンの着用にした。

イラスト③④ 【弥生時代】

場面設定

イラストでは景観および立地について日高遺跡をモデルとした。初夏(田植えの頃)と秋(稲の収穫の頃)のふたつの場面を提示した。時期については両者とも弥生時代後期を想定している。

イラスト③は、初夏の夕暮れで、一日の農作業が終わるとしているところである。人々が集落に帰り、家々

では夕飯の支度をしており、住居から煙がたなびいている。一日かけて採集した山菜を集め、道具の手入れを終えて片づけている人などがいる。

イラスト④は秋晴れの昼下がり。皆が稲刈りに精を出す。集落では刈った稲束を干したり、脱穀したりして、高床倉庫への収納の準備をしている。

集落の景観および立地

日高遺跡は、西谷地、北台地、中央谷地、中島状台地、東谷地に分けられる。台地は前橋・高崎台地を立地の基盤とし、北台地に周溝墓、中央谷地に水田、東台地に集落が営まれる。水田は榛名山東麓からびて相馬ヶ原扇状地の扇端から始まる低湿地にあり、集落は谷地の東側の台地上に位置しており、比較的小規模である(群馬県埋蔵文化財調査事業団1982)。

イラストでは、日高遺跡の水田、集落を南西から北東に向かって俯瞰し、左奥に榛名山が見えるようにした。また、水田と集落の比高差は実際には1.5mだが、イラスト中では、水田と集落の立地の相違を明確にするため、その比高差を実際より強調している。また、集落も実際より南西寄りにし、集落内の様子がわかるようにした。中央谷地の西側は未発掘であるが、水田より低い低湿地として、アシの繁茂する様子を描いた。

集落の人口

集落は、水田が営まれる谷地の東側台地上に位置し、弥生時代後期の土器を伴う堅穴住居が確認されている。日高遺跡の水田を維持するためには、少なくとも30人の労働人口が必要であり¹⁵⁾、弥生時代、稻作が20～25人くらいを基本に行われる(甲元眞之1991)ことを考えると、日高遺跡の一時期の人口も、これに大きく外れないと思われる。イラスト中に描かれる人物も、これに従って25人～30人とする。

水 田

日高遺跡の水田は中央谷地を中心に営まれ、地形に沿って不定形に広がり、ひとつひとつの水田区画は小規模である¹⁶⁾。水田跡をはじめ、中央の水路・畦畔・水口の形状は日高遺跡の発掘調査成果による。地域は隔たるが弥生後期の水田が、大阪府の池島・福万寺遺跡(財団法人大阪文化財センター1991)で検出されている。この遺跡では、小区画水田をはじめ、水路、水口などが良好な状態でみつかり、復元の手がかりとなる要素が多い。そのため、この調査成果もイラスト中に取り入れた。

また、水田の景観や作業の様子は、大阪府立弥生文化博物館に展示されているジオラマによって立体的に復元されており、それについても参考とした。

畑 作

日高遺跡には畑作の痕跡はない。しかし、栽培されていたと思われるマクワウリ、マメ類などの種子が出土している。このことから、遺跡付近に畑作域があったことが推測される。また、日高遺跡からほど近い小八木遺跡では畑作痕とみられるものが確認されている（高崎市教育委員会1979）。弥生時代の集落内の畑作例は、静岡県目黒身遺跡に詳しく見ることができる（沼津考古学研究所1970）。ここでは集落南西の緩やかな斜面で畑作が行われ、畝が規則正しく東西に並んでいる。これらのことと参考とし、イラストでは畑を集落南側に位置させ、周囲に害獣避けの柵を設けた。畑ではマクワウリが栽培されている。

建築物

イラストの集落内には、堅穴住居と高床倉庫を描いた。住居は、住居1軒につき4～5人が暮らしているとして、7軒とした。

堅穴住居の構造は、鎌倉遺跡のものを参考にすると、平面長方形、長辺対短辺が1:1.5～1.9になる（群馬県埋蔵文化財調査事業団1989）。上屋については主に登呂遺跡の復元住居を参考とし、茅葺きの入母屋造り、入り口は妻入り、屋根も茅葺きとした。北風をよけるため、入り口は南向きとした。

日高遺跡では、実際に高床倉庫のものとみられる木製梯子が出土している。高床倉庫は弥生時代後期の典型的な例とされる登呂遺跡の復元例を参考にした（静岡市立登呂博物館1986）。

集落の入り口にある門柱は、丸太状の門柱をたて、鳥居状にしてみた。集落入り口に門柱がある例は、安中市注連引原II遺跡の弥生時代前期の集落において、確認されている（安中市教育委員会1988）。門柱の上に鳥型木製品を置き、祭祀的なシンボルとした。鳥形木製品は、群馬県では出土例がないので、登呂遺跡出土のものを参考としている。

人々の生業

稻作を中心として営まれる。稻作の作業行程は、荒越しから収穫までがあり、さらに収穫後の脱穀作業がある（甲元1988）。

初夏のイラストではこのうち、1、水を引き入れた後のエブリを使った田ならし、2、苗代づくり、3、田植えを行っている¹⁷⁾。ここではイラスト奥の溜池付近から、手前にかけて、1～3を行う。実際の作業は時期を追って順に行われているが、教材として稻作における一連の作業を表現するために、それらを同時にあらわした。

秋のイラストでは稻刈りを行っている。石包丁を使って穂首を刈り取っている様子を描いた。住居近くでは穂

（穂先）の天日干し、臼・杵による脱穀、高床倉庫への収納を行っている。

稻作以外の採集・栽培植物とその季節性は、主に「弥生人の植物食収穫・採集カレンダー」（寺沢ら1981）による。イラスト③初夏場面の畑では、日高遺跡で実際に種子が出土したマクワウリを栽培している。この場合、春蒔きのマクワウリはやや大きな苗に生長している。集落内では女性が採集した山菜の回収、男性が農具の手入れなどを行っている。

農具等

日高遺跡で実際に出土している農具は、鋤・鍬、エブリの一部と思われるものがあり、いずれも木製である。これに、位置関係も近くほぼ同時期の新保遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団1986）で出土した鋤・鍬、二又鍬、エブリ、杵を加えた。また、稻刈りの際使われると考えられている石包丁を描き加える。イラスト3では水を引き入れた時点でエブリを使用している。イラスト4では石包丁、臼、杵を使用する。

イラスト⑤ 【古墳時代】

場面設定

古墳時代のイラストについては、古墳・集落・水田の風景を描いた。群馬郡群馬町の保渡田古墳群と、高崎市、群馬郡箕郷町にまたがる周辺の関連遺跡をモデルとした。

保渡田古墳群一帯は、古墳群・豪族居館・集落・水田・畑など、墓域・居住域・生産地域が総合的に解明されている地域である。

イラスト手前を北とし、保渡田古墳群のうち保渡田八幡塚古墳（以下、八幡塚古墳）、井出二子山古墳（以下、二子山古墳）を配し、奥（南）に向かって水田地帯、三ツ寺I遺跡の豪族居館、周辺の集落が広がる。ここに登場する首長や農民などの動きから、弥生時代を経て、階層差の生まれた古墳時代の生活の様子を描いた。

季節は初夏とし、農民は田植え作業を行っている。古墳に首長が葬られ、後継者である次期首長が従者と共に古墳の最後の仕上げ（埴輪の設置など）を見届けている場面を設定した。

古 墳

まず、イラスト手前に位置する2基の前方後円墳は、向かって右側が八幡塚古墳、左側が二子山古墳である。八幡塚古墳は前方部を北に、二子山古墳は前方部を西に向いている。保渡田古墳群のうち、二子山古墳は5世紀第3四半期～末に築造された前方後円墳である。全長215メートル、墳丘部分は葺石が施される。二重の堀が平面盾形に掘られ、堀内部にある4つの中島が特徴的である。

古墳の築造は、保渡田古墳群内では最も早い時期なので、イラスト中では既に完成後の姿である(右島1994)。一方、八幡塚古墳は、二子山古墳に次いで築造された前方後円墳である。二子山古墳よりひとまわり小さく、全長190メートル、墳丘部分は三段構成で、二重の堀、一重の溝が平面盾形に巡る。二子山古墳と同様、堀内部に4つの中島がある。現在群馬町の上毛野はにわの里公園内に、築造された5世紀後半当初の姿に復元されているので、ほぼそのまま参考としている。イラスト中では未完成であり、首長の埋葬直後、埴輪の設置など、最終の仕上げを行っている。

豪族居館

イラスト左上に位置する豪族居館は、三ッ寺I遺跡である。三ッ寺I遺跡は保渡田古墳群と同時期に存在した当地域の支配者の居住空間である。現在の群馬町三ッ寺に位置し、保渡田古墳群より南東約1キロの位置にあるが、今回のイラストが教材として使用されることを考慮し、豪族居館の構造や、内部の人々の動きが理解できるように実際よりも北西(イラスト手前)に移動させた。

三ッ寺I遺跡は、1981年の上越新幹線建設に伴う発掘調査により部分的に明らかとなった。発掘調査の成果から復元が可能な部分は、中心となる大型掘建柱建物とその周囲を巡る柵列、堀、祭祀に伴う遺構である(群馬県埋蔵文化財調査事業団1988)。そのほかの部分は、群馬県埋蔵文化財調査事業団の発掘情報館および、かみつけの里博物館に展示されているジオラマを参考としている。(未発掘の部分は推定で復元されている。)

集落

三ッ寺I遺跡の豪族居館周辺にひろがる集落は、当時の群馬においては中心的な都市の役割を果たしていたと思われる。集落は居館に近いほど多く、遠ざかるほどまばらに展開するようである。集落には竪穴住居のほか、平地建物、道などがあり、畑の耕作が行われている(かみつけの里博物館1999)。現在発掘調査により明らかになっている集落やその関連遺構は、下芝遺跡群(群馬県埋蔵文化財調査事業団)や西国分II遺跡、諫訪西遺跡(群馬町教育委員会)などが代表的なものであるが、部分的な発掘が多く、集落の全体像はかみつけの里博物館に展示されているジオラマを参考とした。

水田

5世紀の末においては、水田地帯は居館・集落地域の西側一帯に広がる。高崎市の芦田貝戸遺跡、御風呂遺跡、餅井貝戸遺跡、同道遺跡などが発掘されている。しかし、水田地帯すべてが発掘されているわけではない。かみつけの里博物館のジオラマ展示では芦田貝戸III遺跡をモデ

ルとして復元している。これらはすべて小区画水田である。餅井貝戸遺跡の水田からは、小区画水田のほかに大畦が検出され、水路の設備などが整っていたと思われる(かみつけの里博物館1999)。

イラストでは、遠景でも稻作の様子が理解できるよう、初夏の田植え作業を選んだ。

畑作

集落周辺には畑がひろがる。イラストでは、下芝五反田遺跡、芦田貝戸遺跡(ともに群馬県埋蔵文化財調査事業団1998)などを参考にした。下芝五反田遺跡は三ッ寺I遺跡から東に2.3キロと、集落の密集している地域からは距離的に多少離れているが、住居や畑の残存状況が良く、当時の畑作の様子を知ることができる。畑は住居の周囲に点在し、数区画に分かれて展開している。耕作は直線的、かつ等間隔に行われ、地面の傾斜に平行する畠をもつもの、直交する畠をもつものがある。作物はヒエなどが栽培されていた可能性がある。また、発掘調査は部分的に行われているため畑本来の範囲は不明であるが、イラストでは集落付近に集中して描いた。

4 イラスト活用にあたっての提案

ここでは、イラストを使用する場合の提案をしてみたい。本稿のイラストを中心として学習を進めた場合を想定して、その流れを案として以下に示してみた。

○イラスト②【縄文時代】のプリントを提示し、気づいたことや考えたことを発表する。

- ・土器を作っている。
- ・木の実を採っている。
- ・動物(鹿)をとってきたようだ。
- ・犬がいる

○イラスト①【旧石器時代】を示し、縄文時代との違いを考える。

- ・石器だけしかない(土器がない)
- ・テントや衣服は全て革製である(布がない)
- ・調理するときはの様子(土器がないため焼くことしかできない)
- ・少人数で暮らしている(食料確保の面などからあまり大人数では動けない)

○縄文時代の人々の暮らしぶりについて説明文を書く。
→土器づくりへ発展

○イラスト③④【弥生時代】のプリントを提示し、縄文時代との比べて違いを考え、気づいたことを発表する。

- ・田んぼがある。(米づくりをしている)

- ・畑で何かを作っている。

→先にイラスト③のみを提示し、モノクロのイラスト④を用意して色を塗らせ米の収穫時を実感させてもおもしろい。

○イラスト⑤【古墳時代】のプリントを提示し、弥生時代との違いを考えながら、気づいたことを発表しあう。

- ・大きな古墳がある。
- ・水田が広がっている。
- ・作業の指揮する人と作業する人がいる。
- ・古墳の近くに従者を連れた人がいる。
- ・溝とへいで囲まれた大きな家がある。

5 おわりに

「遺跡のイラスト復元を」という課題を前に、私たちにそんなことができるだろうかという迷いや不安があった。それは、前述したように発掘調査で得られる資料には限界があり、失われたものがあまりにも多いからである。イラストという具体的なもので表現するには困難な点が山積していた。しかし、地域に残る埋蔵文化財は有効な教材となり得るものと確信し、今回のものとなった。筆者らの力不足により、再検討や修正を加える点など多くあるだろう。しかし、子どもたちが「むかしの群馬」を想像すること、興味をもって歴史学習に取り組めることに少しでも役立てることができれば、望外の喜びである。

そして、多くの方々に御教示・御指導をいただければ幸いである。

また、今回のイラスト作成に取り組んでみて感じたことは、埋蔵文化財を教材化し、それを活用していくためには学校側と埋蔵文化財側の連携及び不断の努力が欠かせない、ということである。

群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団では、平成8年に開設された発掘情報館を中心として、積極的に調査成果を学校教育に活用していくようとしている¹⁸⁾。これからも、よりよい埋文教材の開発と活用がなされるために、そのような協力体制が今後、ますます整っていくことを期待してやまない。

本稿を記すにあたり、赤山容造・能登健・右島和夫・綿貫邦男・石坂茂・原雅信・大木紳一郎・桜岡正信・齊藤和之・土谷慎二・関口美枝・津島秀章・深澤敦仁・田村博・小成田涼子・勢藤暁美・小林大悟の諸氏をはじめとし、たくさんの方に多くのご教授をいただいた。図版の作成は柳澤有里子氏にお世話になった。誌上を借りて感謝の意を表したい。

註

- 1)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999、2000、佐藤理重「多田山12号墳～7世紀の有力古墳を掘る～」「遺跡に学ぶ」第14号(2000) 小保方香里「今井見切塚遺跡(多田山古墳群)」「平成12年度 調査遺跡発表会」など
- 2 本稿でいう教科書とは、『新訂 新しい社会 6 上』(東京書籍)を対象とした。
- 3)図1で取り上げた想像図については、教科書には各時代にいくつかの想像図があるが、筆者らが作成したイラストが集落とその周辺の景観を中心としたものなので、その中から相当するものを取り上げた。また、教科書の大きさの変化があり、昭和版まではA5サイズ(見開きでA4サイズ)、平成に入ってからB5サイズになった。また、昭和版は2色刷、平成版は主な想像図はカラーになっている。
- 4)本文中で各年度の教科書のことを昭和58、61、64年度版、平成4、8、12年度版と呼んでいるが、これはそれぞれ発行年ではなく、学習指導要領の改訂に伴って変わった教科書が、使用され始めた年度を示したものである。
- 5)鳥浜貝塚は、福井県三方郡三方町鳥浜字高瀬で発見された遺跡である。1962年から25年間にわたる発掘調査により草創期～前期までの長期にわたる縄文時代の集落跡であることが判明した。この鳥浜貝塚の特徴は、2本の河川の合流地点の地下にあり、縄文時代の地層が海拔0m以下という低湿地層に含まれていたことである。土器・石器のほかに木器・縄・編み物・骨角器・丹塗り土器・漆塗り土器など、豊富な有機遺物が出土したことで全国の注目を集めた。「縄文のタイムカプセル」と呼ばれるほど生活全般の様子をよく残しており、縄文時代像を具体的に学習するにはふさわしい遺跡と言える。現在、鳥浜貝塚は史跡公園として復元住居や貝層断面が屋外展示されており、野外学習などに利用されている。なお、これらの出土品は福井県立若狭歴史民俗資料館、及び三方町立郷土資料館に保存展示されている。
- 6)三内丸山遺跡は青森市三内字丸山にある。縄文前期～後期、平安時代の集落遺跡である。1957年から76年にかけ青森市・県教育委員会などにより緊急調査がされた。1992年以降の新県営野球場建設に伴う発掘調査で大小の竪穴住居約500・土壙墓約100・埋設土器約700・掘立柱建物跡20のほか、大規模な粘土採掘坑もあり、さらに土器などの遺物を廃棄したや前期の泥炭層も発見された。1994年8月、遺跡の保存と活用を目的として野球場建設の工事を中止した。また、群馬県埋蔵文化財調査事業団考古学教育研究クラブ原雅信、長沼孝則、小成田涼子氏のまとめられた資料によると、教育出版・光村図書・大阪書籍・日本文教出版の小学6年生社会上の教科書はいずれも縄文時代は三内丸山遺跡を取り上げている。
- 7)登呂遺跡は静岡市登呂5丁目に所在。1943年に軍需工場の拡大工事の際に発見された。1947年には登呂遺跡調査会が、その後日本考古学協会が1948年から1950年まで発掘調査を行い、さらに静岡県教育委員会によって補足調査が行われた。遺跡からは、住居跡、倉庫跡、水田跡、森林跡などが明らかにされ、同時に数多くの土器、木器、金属器などが発見されている。遺跡は1952年11月に、国の特別史跡として指定され、約6万m²が保存されている。
- 8)森将軍塚古墳は長野県更埴市大字森の標高490mの瘦尾根上に位置している国指定史跡であり、昭和40年代に本格的な発掘調査が行われた。古墳時代前期(4世紀代)に築造された全長約100mの前方後円墳である。更埴市を一望する有明山の中腹につくられており、豪族の支配地域を一望できる場所の古墳を造ったことがよく理解できる遺跡である。このように当時の景観を具体的に学習できる遺跡であることから、小学校の教科書に取り上げられているのである。主体部は後円部の中央に上下2段に構築された墓坑をもつ長大な竪穴式石室(長さ7.6m、幅2m、高さ2m)である。副葬品には、三角縁神獣鏡・玉類・鉄器・土器がある。墳丘部には、円筒・壺形・朝顔形・家形埴輪が樹立されている。墳丘は葺石で覆われており、古墳周囲に組合せ式石棺64、埴輪棺12が検出された。1981年から始まった保存整備事業によって墳丘の保存工事が実施された。出土品は更埴市教育委員会に保管されている。
- 9)教科書では「大昔の歩み」という年表資料に「数万年前」の「おもなできごと」として「日本に人が住むようになる(日本列島は、まだ大

- 陸と陸続き」と記載されている程度である。
- 10) 繩文時代の学習の際にイラスト①を提示し、イラスト②との比較を通して前述した点などに気づかせることで、土器の出現や人々の暮らし工夫や変化の意義について、より深い理解に至ると考える。
- 11) 赤城南麓における約20,000年前ごろの後期旧石器時代の遺跡は、著名な岩宿遺跡をはじめ、飯土井中央遺跡、二之宮千足遺跡などがある。
- 12) 多田山丘陵の今井三騎堂・今井見切塚遺跡は、報告書が未刊行(今井見切塚遺跡は現在調査中)であるが、筆者らが発掘調査に直接携わっており、遺跡およびその周辺の景観なども把握しやすいためここを選択した。
- 13) 近藤は参考文献中で「先土器時代」という呼称を用いているが、ここでは旧石器時代で統一した。
- 14) 細野は住居状遺構という用語を用いている。
- 15) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 大木紳一郎氏談
- 16) 日高遺跡の弥生後期水田は不定形であるが、定型化してきている地域もある。
- 17) 甲元によると、乾田もしくは半乾田の場合である。
- 18) その基本的な考え方は「遺跡は生活百科」というものである。すなわち人間生活全般の情報が得られるとの考え方であろう。その意味から、普及に際しては社会科(歴史)のみならず、他教科への活用も展開している。また、平成9年度から「埋蔵文化財の成果を学校教育に活用する」として地域教材開発研究・研修も行っており、その報告書も刊行されている。

参考文献・引用文献

- 赤山容造 1982「堅穴住居」「縄文文化の研究8」雄山閣。
- 安中市教育委員会 1988「注連引原II遺跡」。
- 石坂茂・麻生敏隆 1999「今井見切塚遺跡」「第6回石器文化研究交流会発表要旨」石器文化交流会。
- 植松なおみ 1980「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」「物質文化」35物質文化研究会。
- 財団法人大阪文化財センター 1991「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要II」。
- 大阪府立弥生文化博物館 1991「弥生文化 日本文化の源流をさぐる」。
- 大塚和義 1987「狩人・ラジミールの世界」「季刊民族学」40 国立民族学博物館。
- 尾関清子 1996「縄文の衣」学生社。
- かみつけの里博物館 1999「よみがえる5世紀の世界」。
- かみつけの里博物館 2000「はにわ群像を読み解く 保渡田八幡塚古墳の人物・動物埴輪復元プロセス」。
- 北 俊夫 1997「調べ学習 社会科の授業づくり4 昔の暮らしを調べる授業」国土社。
- 北 俊夫・寺田 登編著 1999「新小学校教育課程講座〈社会〉」ぎょうせい(105-106頁)。
- 群馬県企業局 1980「三原田遺跡(住居編)」。
- 群馬県企業局 1980「三原田遺跡(住居編)」。
- 群馬県企業局 1990「三原田遺跡 第2巻」。
- 群馬県教育委員会 1995「小学校における「身に付く授業」の指導と評価」。
- 群馬町教育委員会 1988「保渡田荒神前遺跡 皿掛遺跡」。
- 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「地域教材開発研究・研修報告書」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986「新保遺跡I」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988「三ッ寺I遺跡」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982「日高遺跡」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「下芝五反田遺跡」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「芦田貝戸・御風呂・餅井貝戸・西下井出遺跡」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「三和工業団地I遺跡(1) 旧石器時代編」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989「師遺跡・鎌倉遺跡」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「多田山の歴史を掘る VOL.1」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「多田山の歴史を掘る VOL.2」。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「多田山の歴史を掘る VOL.3」。
- 甲元真之ほか 1988「田畠の営み」「弥生文化の研究」2 雄山閣。
- 小林達雄 1975「縄文人の生活」「日本歴史 図詳 ガッケン・エリア教科事典1」学习研究社。
- 近藤義郎 1976「先土器時代の集団構成」「考古学研究」22巻4号。
- 静岡市立登呂博物館 1986「特別史跡登呂遺跡」。
- 高崎市教育委員会 1979「小八木遺跡調査報告書(1)」。
- 堤 隆 2000「搔器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」「考古学研究」第47巻第2号 考古学研究会。
- 堤 隆 2000「皮鞣しの場—搔器の分布と場の機能—」「MICROBLADE」創刊号 八ヶ岳旧石器研究グループ。
- 寺沢 薫・寺沢知子 1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究—初期農耕社会研究の前提として—」「考古學論叢」第5冊 横原考古学研究所。
- 東京書籍 1989、1995、1996、2000「新訂 新しい社会 6上」。
- 東京書籍 1989、1995、1996、2000「新訂 新しい社会 6上 教師用指導書」。
- 丹羽佑一 1993「環状集落の構造と類型」「季刊考古学」第44号 雄山閣。
- 沼津考古学研究所 1979「目黒身」。
- 林謙作 1994「集落を構成する施設(1)住居」「季刊考古学」第55号 雄山閣。
- 古川清行・梶井貢・渡辺やす子編著 2000「わくわくどきどきチャレンジ社会科 小学校6年」東洋館出版社。
- 細野高伯 2000「住居状遺構—小暮新山遺跡の事例から—」「月刊考古学ジャーナル」No.465ニュー・サイエンス社。
- 右島和夫 1994「東国古墳時代の研究」学生社。
- 文部省 1999「小学校学習指導要領解説 社会編」日本文教出版。
- 文部省 1993「小学校社会指導資料 新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造」東洋館出版社。
- 山崎 光 1976「赤城村三原田遺跡—敷石住居移築復原工事略報告—」「群馬文化」群馬文化の会。
- 鷺田豊明 1996「環境と社会経済システム」勁草書房。
- 渡辺 誠 1994「編み物の容器—籠と筈・箕—」「季刊考古学」第47号 雄山閣。
- 渡辺 誠 1983「縄文時代の知識」東京美術。

SUMMARY

An Attempt to Draw illustrations of Restored Ancient Landscapes as Regional Teaching Materials for Social Studies —A Focus on Archaeological sites in Gunma—

SATO Rie, OBOKATA Kaori

Looking at the learning of history in school education, illustrations and reconstructions of life in the past are core materials necessary for school children who are starting to study history. This is due to the advantage of visualising images by illustrations that enables them to understand the whole idea of the actual lives of a specific period.

Looking at the Japanese text books of the 6th grade when history education really starts, the fact that many imaginative illustrations are cited in the texts proves this merit of visualisation. These illustrations are often updated to give more concrete and better idea of history.

Social Studies in elementary schools in the New Government Guidelines for Teaching of 1999, visits to nearby monuments or investigations to cultural properties are recommended and the study of history in relation to the local community's history is expected to have more of an impact. Nearby sites (buried properties) are the genuine local history left underneath the ground where they live. Thus these images can no doubt stimulate children's attentions and interests and they can turn into educational materials for teaching history by drawing these sites as illustrations which are very close to their lives and concrete.

In this article we tried to draw several illustrations to be used in teaching history in schools using the results of rescue excavations of Gunma.

The periods and the original sources of the illustrations are as follows;

1. Paleolithic: Tadayama hill located at the foot of Mt. Akagi ; Imai Sanki-do Site, Imai-Mikirizuka Site.
2. Jomon Period: Akagi Village, Miharada Site.
3. & 4. Yayoi Period: Takasaki City, Hidaka Site.
5. Kofun Period: Gunma Town, Hotoda Kofun Burial Groups and Mitsudera I Site.

Keywords

Period : Paleolithic, Jomon, Yayoi, Kofun, Modern Period

Area : Japan (mainly Gunma prfc.)

Objects : Source materials for teaching history at elementary school through the local history, Illustrations